

山本 武利（埼玉大学） 西田長寿氏の労作と私の歴史研究

私が日本新聞学会に入会したのは、大学院修士課程に入った時であるから、今から十七年前のことである。研究そのものは学部時代からとりかかっているもので、約二十年経過している。この二十年間、常に手許において活用させてもらった本が、西田長寿氏の『明治時代の新聞と雑誌』（一九六一年）なのである。

この本は私が日本のジャーナリズム史研究を開始した年に刊行された。それから数年たった頃、東大明治新聞雑誌文庫が国会図書館かで、氏にばったり会ったとき、私がいつものように氏の労作を持参しているのが氏の目にとまった。氏は当時だしたばかりの増補版をあげるので、初版本を使うのをやめなさいといわれ、後日、約束通り、その増補版（一九六六年）をくださった。聞くところでは、初版にあったいくつかの誤植などが気にかかるので、増補版をだされたとのこと。増補版は索引があるのでもいいそう利用価値が高まったが、本文は初版と変りはない。そして初版を書斎が研究室に、増補版をカバンに必携するのが、私のこの二十年間の研究生活であったといつて過言ではない。

私のような者が新聞史ばかりでなく、政治史、文学史など幅広い隣接領域の研究者に少なくないことを知っている。私たちジャーナリズム史を実証的に研究せんとする者には、今後とも

氏の『明治時代の新聞と雑誌』が必携基本文献であることはたしかである。この本のおかげで、私は『新聞と民衆』（一九七三年）や『近代日本の新聞読者層』（一九八一年）といった本や、処女論文「明治三十年代前半の新聞読者層」（『新聞学評論』一六号、一九六七年）以来のいくたの論文をまとめることができた。『新聞に見る政治広告の歴史』（一九七二年）や、『近代日本の新聞広告と経営』（共著、一九七九年）といった広告史研究を行う際においても、たびたびこの本を手がかりに事実を確認することができた。

氏のお名前が「たけとし」であることも、氏の労作に親しみを感ずる一因であった。それはともかく、この本にたいし、故宮城謙一氏がよせた書評（『新聞学評論』一二号、一九六二年）くらい講壇研究者の意地悪さを示すものはない。宮城氏は「歴史的、立体的なイメージとして、明治の新聞・雑誌Vの山脈がはつきりとは浮かんでこないもどかしさと不満が残る」とし、その具体例として、『時事新報』と福沢諭吉にかんする本書の断片的な記述を引用している。宮城氏の批判の否店をここで論ずる余裕はない。宮城氏は、この不満は「本書にたいして、いわゆる望蜀に類するものであったかもしれない」と、書評の最後の方で断ってはいる。しかし書評の大半が「不満」にかんする記述であり、この書評しか接しない読者なら、西田氏の本を求める気が起らないだろう。宮城氏が長生きされて、西田氏の労作を超える実証的な研究をだされたらよかったと思う。ともあれ、その後の研究書で西田氏の労作ほど幅広い領域の新聞・

雑誌の史実を簡潔、正確におさえたものは見あたらない。正当な批判の前提には、この本以上に史実を探索しなければならぬ。それをせずに批判、冷笑するのが、高踏的な講壇研究者の得意なやり方である。

私は二十年間、西田氏が対象とした時期の原史料にあたってみて、この本の内容の多様性と正確さを認識し、一生かけても、西田氏の労作を超えるものは、私自身にはできないことを痛感している。やはり、長年、原史料に接し、それを分析してこられた蓄積は大きい。また史料への愛着もこの労作を支えている。氏は『日本古書通信』（一九六七年十一月十五日号）で宮武外骨「新聞雑誌関係者略伝」を補訂する作業を長期にわたって行っている。この仕事も大変貴重なものである。その他にも、氏の編になる『東洋自由新聞』（一九六四年）や『明治新聞人文学集』（一九七九年）などがある。

しかし西田氏はわれわれ後学のたび重なる要望にもかかわらず、『明治時代の新聞と雑誌』の続編をだしていない。本書は明治前期に詳しい。だから明治後期に力点をおいた続編の刊行は、われわれの鶴首するところである。氏の手を労らさなければ、今後長く明治後期のジャーナリズムの史実を正確に把握した本がでないことは、大方の一致するところである。氏が重い腰をあげようとしなかった一因は、憶測するに、かの宮城氏の書評を気にされてきたことにあるのではないかと思われる。もしそうなら、宮城氏は罪な書評をしたことになる。とにかく、続編の刊行とのための西田氏の一層のご健筆を祈っている。

香内 三郎（東京大学） 「歴史」研究―極私的感想

生涯を通じて一つの歌を、というのが、物書きの理想であるのかも知れないが、私は全く駄目であれも、これも、しかも最後の断崖にまで行きつけず、たえず逆行して、道のわかれに泣いている、といった現状であろうか。

とはいえ、私の場合、メディア史へのスタート・ラインは、学会草創からあまりたっていない研究生のときに聞いた内川芳美先生の「新聞史」の講議でひかれていたといっている。先生、シーバートの「類型論」を紹介され、帝国議会におけるメディア法制の推移を軸に、「言論の自由」の史的情况を概観された。つながっているものとして紀要に書かれた論文（近代新聞史研究方法論序説、「新聞紙法の制定過程とその特質」）など広い意味でのメディアの「近代」、より正確に言えばメディア史における「近代」とはなにかを問題にされたものを、あげてもよい。以降、私なりに歪めてしまっているだろうが、「言論の自由」が論ぜられる史的情况の再構成（『言論の自由の源流』、メディアにおける「近代」、方法的倒立でいえばメディアの「市民社会」とはなにか、一貫したテーマ底流ではある。「真理」（大文字の「truth」が小文字に変わってゆく過程）、「事実」（すぐれてルネッサンス的概念）、「風刺」の三項が形でくる三角形の内部空間が、市民社会ジャーナリズム生成の場である、というのが、六〇年代ぐらいから変わらない私の大テーマであって、「一八世紀英国における言論と社会」、「一八世紀イギリ